

## 深刻な実態の映像化

松本侑壬子・ジャーナリスト

タイトルからしてずばりドメスティック・バイオレンス。ここでは夫の妻への暴力の姿を描く。有名な「20人に1人の女性が、配偶者から生命に危険を感じるほどの暴力を受けている」という内閣府の全国調査結果をはじめ、「殺人事件の女性被害者の約3割が夫、内縁の夫から殺され」、「離婚調停を申し立てる妻の約3割が離婚理由として“夫の身体的な暴力”をあげている」などの深刻なDVデータを映像で描いた作品である。

モデル夫婦は、一回り年の違う共働きカップル。

職場では中間管理職として働き盛りの夫・昭吾は41歳のサラリーマン。夫を愛称で呼ぶ妻の泰子、29歳は宝石店できばきと働いている。結婚3年目の愛し愛されて典型的なDINKS(子どものいない共働きカップル)である。

順調に思えた家庭生活に、異変は突然やってきた。結婚記念日の夜、夫は妻のために花束を買い、妻の働くショップの前に立った。ショーウィンドウ越しに見る妻は、夫に気づかず若いハンサムな同僚と何やら親しげに打ち合っている。暗い外から妻を見つめる夫の顔が次第にこわばり、ポケットから携帯電話を取り出し妻を呼び出すと、「今日は体調が悪いから先に帰る」と伝えて立ち去る。

夫の嫉妬は信じがたい形で妻を襲い始める。何も知らずに帰宅した妻が眠っていると、夜中にパジャマ姿の夫が彼女のベッドの脇に立ち、頭上の蛍光灯を点けては消し点けては消し…と延々と繰り返す。その表情は常軌を逸していた。そして、それがすべての始まりだった。

妻の写真立てから友人との思い出の写真が抜き

取られ、アルバムも捨てられた。妻が抗議すると夫は平然と「過去ばかりふり返っててもさ」。さらに「生活費は渡すから」と勝手に妻の銀行口座を解約する。「仕事を辞めてほしいから」と知らぬ間に通勤定期も抜き取る。風邪で寝ている妻にのしかかって強姦のようなセックスを強要する。抵抗すればさらにすさまじい暴行が加えられる。

暴力は一度始まると急激にエスカレートする。調味料が気に入らないからと、容器を叩き落す、妻が友人と楽しそうに電話していると突然食卓をひっくり返す、風呂水が汚いからと妻を浴槽に漬ける…。妻の実家の父親が心配して電話をかけてくると告げ口したと殴り倒す。悲鳴が外に聞こえないようにとカラオケボックスに連れ出して殴りつける。妻は隙をみて逃げ出し血だらけの顔で交番に駆け込むが、「夫婦間のことには警察は口出しできない。ほら、旦那さんが心配しているよ」と、追ってきた夫に引き渡されてしまう。家庭という密室の中で命の危険さを感じ始めた妻は…。

恐らく実例に基づいているのであろうが、次々に展開するDVの実態は恐ろしいほど。表現に抑制は効いているものの、仮借ない性描写も含めて、一瞬サディズムやポルノ場面と錯覚しそうな“男の目”も感じられる。DVの含むそうした面は、ただ行為を描写するだけでは“刺激的な他人事”である。被害者側の恐怖心や嫌悪感、心身の傷の深さに光を当てることで、DVは“愛の変形”などではなく犯罪であることが明確になるはずだ。

DVの犯罪性をもっと明らかにされなければならない。本作は貴重なその第一歩である。



日本映画 (85分) / 中原俊監督

『 DV 』

2月5日よりシアター・イメージフォーラム (東京・渋谷) にてロードショー

